

存在様態と述語 : トマス・アキナスと様態理論

著者	加藤 雅人
雑誌名	関西大学哲学
巻	25
ページ	165-183
発行年	2005-10-31
その他のタイトル	Aquinas on modus essendi and Predication
URL	http://hdl.handle.net/10112/11934

存在様態と述語——トマス・アクイナスと様態理論

加藤雅人

存在と述語

一般に、真なる基本命題を形成しようとするとき、命題の論理的主語は存在する個体を指示していると想定されている。したがって、当の個体の「存在」(existence) はすでに論理的主語の「指示」(reference) という働きによって与えられており、それ以上その個体について有意義に存在を述語することはできない。有意義に述語できるのは、その個体の特徴や属性のみである。

ウィリアムズによれば、「ある対象に何かを述語すれば、その対象にその述語が当てはまると語るその時に、その対象の存在を前提していることになる」⁽¹⁾。《existence》という語からあらゆる存在論的な意味を排除しようとするウィリアムズも、ここでは主語が対象の存在を「前提する」(presuppose) という考え方にたっている。ただし、その場合の「存在」はあくまで個体の属性ではなく概念の属性であり、フレーゲ的にいえば第一階の述語(the first-level predicate) ではなく第二階の述語 (the second-level predicate) であるから、その対象が「存在する」と述語することはできない⁽²⁾。

エイヤーもまた、ものの存在を主張するときその存在を属性とみなすべきではないと考えている。彼は次のように言う。「ものにある属性を帰すとき、われわれは暗にそれが存在することを主張している。したがって、もし存在それ自体が属性であるなら、肯定的存在命題はすべてトートロジーとなり、否定的存在命題はすべて自己矛盾となるだろう。だが、これは正しくない」⁽³⁾。

ストローソンによれば、述語するということは、「或ることを、ある個体、またはあるクラスの一部や全部に帰属させたり、まったく帰属させなかつたりすることであつて、この場合、その個体またはそのクラスの構成員の存在は前提となっている」⁽⁴⁾。この見解において、存在は論理的な主語の指示的用法と結びついた「前提」(presupposition)とみなされている。たとえば、「ソクラテスが存在する」という陳述は、「ソクラテスの存在」を前提しているが、その前提はまさにこの陳述が主張していることであるから、この陳述はトートロジーである。それゆえ、「ソクラテスが存在する」は、主語—述語命題の論理形式を有しているとは言えないのである⁽⁵⁾。

ところで、存在は基本命題の主語によつて前提されているという考え方は、必ずしも現代の分析哲学のオリジナルではない。中世哲学においても、存在は述語によつて表現されるのではなく、主語の意味表示のなかに含まれているという考え方があつた。一三世紀末から一四世紀初めにかけてパリで活動した「様態論者」(modistae)の主張がそれである⁽⁶⁾。本稿においては、まず命題における述語と存在の関係についての様態論者の見解について考察し、つぎにこの見解との対比において、トマス・アキナスにおける述語と存在に関する見解を明らかにする。

様態理論における述語の様態と存在

様態理論に影響を与えたのは、アンモニウスやプリスキアヌスなどのラテン語文法家たちであった。まず、アンモニウスによれば、名詞は「ものの存在」(existencia rerum)を意味表示し、述語動詞は「能動や受動」(actio vel passio)を意味表示するが、ものの存在はそれの能動や受動に先行するので、名詞のほうが述語動詞よりも優先する⁽⁷⁾。また、中世におけるラテン語文法の標準教科書を書いたプリスキアヌスは、時制と能動・受動によって述語動詞を規定した⁽⁸⁾。プリスキアヌスはギリシャの文法家アポロニウスの“*ὑπαρτικῶν ὀνόμα*” (存在の述語動詞)というギリシャ語を、“*verbum substantivum*” (実体の述語動詞)とラテン語訳した結果、《est》という述語動詞から存在の概念を取り除いた⁽⁹⁾。こうして、アンモニウスやプリスキアヌス等によって、述語動詞から存在の概念が取り除かれた。

様態論者たちによれば、言語の「表示様態」(modus significandi)は、知性の「認識様態」(modus intelligendi)を介して、実在の「存在様態」(modus essendi)を反映している。したがって、言語の表示様態の研究すなわち「文法学」(grammatica)は、実在の存在様態の研究すなわち「哲学」(philosophia)の一部とみなされた⁽¹⁰⁾。一四世紀初頭の様態論者エルフルトのトマスは、存在様態を「エンスの様態」(modus entis)と「エッセの様態」(modus esse)という二つに区分し、前者を名詞の、後者を述語動詞の表示様態とした⁽¹¹⁾。「エンスの様態」とは、へものくゝに内属する「状態」(habitus)や「持続」(permanens)の様態で、それによってへものくゝは「ある(存在する)」(habere esse)。「エッセの様態」とは、へものくゝに内属する「変化」(fluxus)と「継起」(successio)の様態で、それによってへものくゝは「なる(生成する)」(habere fieri)⁽¹²⁾。ここで注意すべきことは、へものくゝが「ある(存在する)」のは、「エッ

セの様態」ではなく、「エンスの様態」によるということである。ここでは、へものゝの存在はへものゝに内属する状態や持続と同一視され、そのような様態が「エンスの様態」と名づけられているのである。これに対して、「エッセの様態」とは、へものゝの「存在(あること)」(esse)ではなく、「生成(なること)」(Fieri)と同一視されている。そして、名詞はエンスの様態で意味表示し、述語動詞はエッセの様態で意味表示する。つまり、名詞がへものゝの存在を意味表示し、述語動詞はへものゝの生成・変化を意味表示するのである。

以上のように、様態理論で使われる「存在様態」という用語は、たんにへものゝの「存在」を意味する「エンスの様態」だけでなく、へものゝの「生成・変化」を意味する「エッセの様態」も含めた広い意味で、知性の認識様態や言語の表示様態と区別された、へものゝに属する「固有性」(proprietas)をあらわしているのである。そして、「エンスの様態」と「エッセの様態」は、実在においてはへものゝの固有性であり、言語においては、それぞれ名詞(主語)と述語動詞という表示様態である。したがって、エンスの様態で意味表示する名詞(主語)は、エッセの様態で意味表示する述語動詞に先行する。なぜなら、実在においてへものゝが何かに「なる」(＝エッセの様態)ためには、まずそれが「ある」(＝エンスの様態)必要があるからである¹³⁾。

このように様態論者は、へものゝの存在をあらわす「エンスの様態」を、述語動詞ではなく名詞(主語)の表示様態とみなすことによつて、存在の表示を述語動詞から名詞(主語)に移したという点で、アンモニウスやプリスキアヌスと一致する。様態論者は、述語動詞が「エッセの様態によつて」(per modum esse)意味表示すると語っているが、明らかにこの《esse》という語には存在の含意はない。こういうわけで、様態理論は、すでに述べたようなある個体にある属性を述語すればその個体の存在を前提していることになるという現代の分析哲学と、明らかな類似性がある。様態論者たちは、主語名詞(実体をあらわす)の述語動詞(生成や変化をあらわす)に対する優先を

主張し、述語動詞《esse》を変化や生成の意味に限定する。エッセの様態(述語動詞)はつねに実体(主語)に後続し実体から出てくるはたらき(operatio)であると彼らは考えたので、述語動詞《esse》は存在以外の何かを指示しなければならず、それが生成・変化であるとみなした。明らかに、様態論者の考え方は、トマスの、エッセはへものゝ本質の現実態(actus essentiae)である¹⁴(したがってへものゝについて述語されうる)という考え方とは異なっている。彼らには、へものゝに述語される本質の現実態としてのエッセという考え方はありえない。さらに、様態論者たちの考えでは、トマスの言う本質(essentia)とエッセ(esse)の区別は、たんなる表示様態の区別にすぎないものとなる。すなわち、本質はエンスの様態(=nomen)で意味表示し、エッセはfieriの様態(=verbum)で意味表示する。それらは同じ概念を意味表示する二つの異なった様態に過ぎないことになる¹⁵。したがって、彼らの考えによれば、本質とエッセは実在的に区別されるエンスの内的原理であるというトマスの主張は、文法学的理由で無意味となる。

しかし、様態理論の考え方には難点がある。主語を存在するエンスと同一視し、述語動詞を(fieriの意味での)《esse》と同一視した結果、次のような明らかな例外を説明できなくなったことである¹⁶。すなわち、主語は「欠如」(privatio)や「虚構」(figmenta)といった非存在を指すこともしばしばあり、また述語動詞《est》は、生成・変化だけでなく、「実体の述語動詞」として、ある実体を構成する本質的固有性を述語することがある、という例外である。これに対して、様態論者のなかには、表示様態と存在様態の中間としての「認識様態」の役割を強化することによって、表示様態と存在様態の1対1対応に基づいた文法学の明らかな例外を説明しようとするものもいた(ラドウルプス・ブリトなど)。しかし、このような説明は、表示様態は存在様態に直接的に基づいていないということを含意し、結局は、文法学は厳密な学であるという彼らの主張を弱体化させることになった。

トマスにおける述語の様態と存在

トマスは、『命題論注解』において、名詞や述語動詞の「表示様態」と、「意味表示された実在」(res significata)とを明確に区別することによって、言語のレベルと実在のレベルの混同を注意深く避けている。基本的命題の名詞(主語)は、「自体的に存在する実在(すなわち実体)の様態で」(per modum rei per se existentis)意味表示し、それによって意味表示された実在は、何であれ実体として概念化されたものである。たとえば、「走る」(currere)という行為も、『cursus』というような抽象名詞で表現されると、ある種の実体の意味に転換される。『cursus』は他の名詞と同様、「実体の様態で」意味表示するからである。『cursus』は実在における走る行為を意味表示してはいるが、時制(それは動詞の統語論的特性である)を含蓄していない。なぜなら、時制は「現実態にある」(actu esse)を含み、動詞にのみ属すからである。『cursus』は走る行為を実体へと転換し、その行為を動詞によって表現される活動の領域から「文法的に」排除する。名詞を、したがって主語を規定するのは、まさにその名詞の「表示様態」であって、「意味表示された実在」ではないのである。そして、表示様態を決定するのは、認識様態すなわち知性があるものを概念化する仕方なのである。したがって、トマスにとって、まさに「認識様態」が語の表示様態と実在の存在様態を仲介するのである¹⁷⁾。

このことはまた述語動詞にも当てはまる。トマスは、述語動詞が能動や受動を意味表示するという伝統的な規定を認めた上で、それに加えて実体や付帯性などの属性(それは能動や受動ではない)を述語するためにも述語動詞がしばしば使われるという問題を次のように説明する。名詞と同様、述語動詞を規定するのも、述語される内容ではなく、述語付けという機能そのものである¹⁸⁾。たしかに、トマスは『命題論注解』において述語動詞の典型であ

る《est》(それはすべての述語動詞に暗黙に含まれている)を「現実性」(actualitas)の概念と結び付けている。《est》が意味表示するのは、ある形相ないし現実態がある個体に「現実的に内在している」(actualiter inesse)ということである。典型的述語付けでは、主語は個体を意味表示し、述語動詞はその個体もっている(実体的形相や付帯的形相によつてもたらされる)「現実態」(actus)、あるいはその基に「共通に」(communiter)あるエッセという「現実態」を意味表示する¹⁹⁾。しかし、繰り返し返すが、述語動詞を規定するのは、その意味内容(現実態)ではなく、それによつて実行される「述語付け」(praedicatio)という働きそのものである。命題が真理値をもつために必要なのは、実在なのは、主語について何かが述語されるということである。つぎに、その命題が真であるために必要なのは、実在においてある個体がどのようにへあり、どのように行為するかを語っていることである。したがって、述語動詞は、ある個体の存在と行為の様態についての意味論的内容と結びついていなければならない。そして、その意味論的内容は、今現実態にへある、過去にへあった、未来にへあるだろう、というように、述語動詞の時制によつて統語論的に表現されるのである。

明らかに、述語動詞が意味表示する現実態は、伝統的な述語動詞の規定における能動や受動よりもはるかに広い概念である。トマスによれば、述語付けは知性の働きであり、したがって抽象とともに重要な「認識様態」の一つである²⁰⁾。心は実体とその述語から「構成的」現実態(エッセと本質)を分離し、個体が消滅しなければ「実在において」分離されえないものを、ある個体から分離したり帰属させたりすることができる²¹⁾。ある個体について「述語されるもの」(quod est)は、その個体をそのように「へあら、しめるもの」(quo est)である。このquo estは、個体のエッセの現実態と、個体の本質や本性の現実態の両方を含んでいる。トマスが《forma partis》と呼ぶもの(人間にとつては魂)は、《quo est》とも呼ばれるが、それは全体として意味表示しないので、個体には述語されえない

（「ソクラテスは魂である」とは言えない）⁽²²⁾。

様態論者たちは、言語の体系化を意図したので、基本的な品詞の多彩な意味表示をしばしば見逃した。彼らは主語はすでに構成されたエンスを意味表示し、述語動詞はその基体から出てくる活動（生成・変化）を意味表示するとみなした。つまり、実体を構成する二つの主要な現実態（エッセと本質）は、主語の意味表示のなかにすでにあるとみなしたのである。しかし、ここから直ちに生じる疑問は、このような実体を構成する現実態は個体についてのどのように述語されるのかということである。というのも、個体はそのような構成的現実態がなければ（述語付けの主語として）存在しないからである。

述語動詞《est》の多義性

これに対して、トマスは述語動詞《est》が様々な意味表示を取りうることを認めた。彼は《est》が一つ以上の仕方の意味表示する（すなわち、ときには運動を含意し、またときには運動を伴わない実体の現実態を含意する）と考えた⁽²³⁾。トマスは、アリストテレスに従って、現在時制の述語動詞はすべて現在分詞とコプラに転換されうると考えた。《Socrates sedet》は《Socrates est sedens》となる⁽²⁴⁾。この場合、《est》を使うことは進行中の変化や運動を含む活動を内包する。しかし、《est》はまた「実体の述語動詞」としても機能する。そして、すでに見たように、このように《est》がときに（たとえば、実体の現実態を述語するとき）、運動を伴わずに意味表示するという傾向は、コプラの首尾一貫した理論を探求していた様態論者にとっては難問であった。これに対して、トマスは《est》のこ

のような多彩な意味表示を肯定的に受けとめている。トマスの言語観によれば、実在は区分され整然とした記号に還元されうるような体系ではないので、一つの語がしばしば一つ以上の機能を果たさなければならぬ。このことは、すべての述語動詞に内在する述語動詞《est》の場合にとくに当てはまる。《est》は、厳密に固定された意味表示を守るというより、むしろ事物の多様なあり方を多様に表現できるのでなければならぬ。対象は運動している場合も、実体である場合も、付帯性である場合もある。これらの様々な存在様態を捉えるためにたった一つの語《est》が使われるのは、まさに文を聞いたり読んだりする人間が、意味表示されている実在をその一つの語《est》を通して解釈するからである。ある特定の文脈における《est》が何を意味表示するかは、それが実在の多様な側面のうちのどの面を表現しようとしているかによってきまる。この意味で、対象の様態は、表示様態の中には直接反映されていなくてもよい。言語によって表現されていることを正しく解釈するためには、最終的には対象そのものを見る必要があるからである。

トマスは、《est》はときに運動と共に意味表示し、またときに（実体の述語動詞のように）運動なしに意味表示するという伝統的な二区分は承知していたが、それには満足しなかった。『命題集注解』において、《est》が取りうる意味表示の可能性についてのもっと細かい区別が見られる⁽²⁵⁾。

- (1) 《est》は実在の本性ないし本質を意味表示することがある。たとえば、Homo est animal rationalis.
- (2) 《est》は本質の現実態を意味表示することがある。これは、エッセの第一現実態のことで、後続するあらゆる活動に現実性を与える。たとえば、生物にとつての vivere。
- (3) 《est》は命題の真理を意味表示することもある。この意味で《est》はコプラと呼ばれる。たとえば、《Socrates est sedens》の《est》は、《Socrates》と《sedens》との結合（＝判断）を成立させると同時に、この命題が「真

である」ことを意味表示する。この命題が真であるのは、対象が実在的にそのようにへある場合に限る。

最初の二つの《est》は、実在における本質とエッセの実在的区別を反映し、第三の《est》は、述語付けによって命題が真であることを意味表示する（《ens sicut verum》とも呼ばれる）。しかし、この三区分は結局二区分に単純化される。というのも、心の中で命題を形成する時の知性の働きを意味表示する第三の《est》とは対照的に、最初の二つの《est》は「心の外の実在（ens extra animam）を意味表示するもの」とまとめられるからである⁽²⁶⁾。

《ens sicut verum》という表現は基本的に一義的な意味を持つているのに対して、《ens extra animam》という表現は、基本的にアナログ的である。『形而上学注解』によれば⁽²⁷⁾、《ens extra animam》のアナログ的な意味は、範疇に区分される実在的エンスの《est》の意味の一つとみなされている。エンスは類ではないので種に分割されない。しかし、それは述語付けの仕方に基づいて様々な範疇に区分され、その述語付けの仕方はさまざまな存在様態から帰結する⁽²⁸⁾。述語付けは「存在を語る」方法とみなされている。しかし、どのような仕方で或るものが「へある」と語られる」かは、それがどのような仕方で実在においてあるかによって決まる。《est》という述語動詞は、述語されるものの存在様態によって、その意味をさまざまに変える。《Socrates est animal》の場合、《est》は実体の存在様態を意味表示する。なぜなら、ソクラテスはその実体形相ないし本質によって動物だからである。第二に、質や量が個体について述語されるとき、《est》は内的な付帯的存在様態を意味表示する。これはその個体が実在的にもっている付帯的完全性である。たとえば、《Socrates est albus》において表現される「ソクラテスの白さ」という完全性である。トマスは、関係の範疇をこの《est》の意味の第二グループに含めている。ただし、厳密に言えば、関係は端的には実体「においてある」のではなく、他の実体「に対してある」という特別なあり方をしている⁽²⁹⁾。最後に、《est》は外面的な存在様態、すなわち純粹に外面的な「所有」を意味表示することができる。たとえば、

《Socrates est vestitus》は、「着衣」という属性がソクラテスに内在していることを意味表示しているわけではない。そうではなく、それは「着衣」という外面的付帯性を意味表示し、したがってそれは《Socrates est albus》によって意味表示される「ソクラテスの白さ」とは根本的に異なる存在様態を意味表示している。トマスは時間と場所という付帯性をこの外面的付帯性のグループに含めている。彼はまた能動と受動という範疇も含めるが、それらのあり方はその他のものとはまったく異なっている。なぜなら、能動の根源と受動の終点は個の実体の「中にある」からである。したがって、能動と受動という範疇は、この第三グループの他の範疇のように個体にとって全面的に外的というわけではない。

存在様態と述語動詞

以上のような諸範疇における《est》のアナログアの意味について、トマスが存在様態を根拠にしていることは注目すべきである。或る個体がどのような仕方でも「《est》と語られるエンス」であるかを解釈するためには、それが実在においてどのような仕方であるのかを見なければならぬ。各範疇において、どのようなタイプのもの（実体的あるいは付帯的、内在的あるいは外面的）が述語されているかによって、《est》はさまざまな意味を取る。まさにこのように《est》がさまざまな意味を取ることができるところこそ、述語付けによって個体のさまざまなあり方が捉えられるのである。そして、まさにこの点で、トマスの述語動詞の理論は様態理論とは区別される。というのも、様態理論においては、述語動詞には単一の表示様態しかなく、それはすでに存在している個体の生成や変化という単

純な存在様態に基づいていられると考えられていたからである。

ところで、範疇に区分された実在に関わる《est》(それは本質的にアナロギア的である)とは対照的に、命題の真理を意味表示する《est》は一義的な意味を持つている。この《est》は、『aliquid dictum est verum』ということすなわち「述語されたことが真である」ということを意味表示する⁽³⁶⁾。『形而上学注解』におけるこのような《est》の最初の例は、『Socrates est albus』である。これは「ソクラテスが色白であることは真である」ということを意味表示する。また同時に、この述語付けは「色白」という付帯性をソクラテスについて述語付けているともみなされるので、明らかに、同じ《est》が真理主張と属性の述語付けを兼ねているわけである。或る述語付けが真であるかどうかは、その基体が実在においてどのような仕方であると語っているかによってきまる。しかし、知性は述語付けの主語として欠如を取ることできるので、主語は必ずしも実在の個体に対応するとは限らない。たとえば、「盲がある」(caecitas est) という命題がそうである。これが主張しているのは、「何か盲である」(aliquid est caecum) ということが「真である」ということであって、盲が実在におけるエンスであるということではない。

トマスは『形而上学注解』における《est》の意味の議論を終えるにあたって、アリストテレスの言っていない或ることに言及している。すなわち、個体に《est》を述語付ける可能性である。トマスは、『Socrates est』という述語付けを例にとりて、『est』の ens extra animam と ens sicut verum という意味の二区分について考察している。ens extra animam という観点から見れば、この命題はソクラテスが「実在において」もっている実体的エッセの現実態をソクラテスについて述語している「実体的述語」(praedicatum substantiale)である⁽³⁷⁾。しかし、この述語付けを ens sicut verum の観点からみれば、述語されているのはまさに、『Socrates est』が「真である」ということなのである。アキナスはこれを「付帯的述語」(praedicatum accidentale)と呼んでいる。というのも、個体について言語において述

語付けられることは、当の個体にとってはまったく付帯的な出来事だからである。これに対して、ソクラテスのエッセの現実態は彼が生存し続ける限り、つねにソクラテスという実体に内在するものである⁽³²⁾。

命題の真理を意味表示する《est》によつて、「盲」や「悪」といった欠如や非存在が、主語として命題の中に現れることが可能となる。何であれある主語は「実体の様態によつて」意味表示するが、それによつて意味表示されたものがどのように存在するか（実体としてか、属性としてか、活動としてか、欠如としてか、など）ということは、意味表示されたものの存在様態によつて決まるのであつて、表示様態によつて決まるのではない。命題の真理を意味表示する《est》は、欠如や非存在を主語とする命題だけでなく、範疇に区分される実在を意味表示する命題の中にあられる。その場合、主語は存在する実体を意味表示（指示）し、述語動詞はその実体の「あり方」を意味表示（指示）している。たとえば《Socrates est albus》は、存在するソクラテスの色白という属性のあり方を意味表示すると同時に、その命題が真であることも主張するので、このような《est》は二重の役割を果たさなければならない。

結論

基本的命題において、存在は論理的主語の指示的用法と結びついた「前提」であって、けっして有意味に述語されることはありえないという現代の分析哲学の考え方は、中世の様態論者の考え方と類似している。様態論者は、 \langle もの \rangle の存在の内的根拠としての「エンスの様態」を、述語動詞ではなく名詞（主語）の表示様態とみなすことによつて、存在の表示を述語動詞から名詞（主語）に移した。これに対して、トマスによれば、命題の真理主張にとつての必要条件は、述語動詞による述語付けである。というのも、実在については、まさに述語動詞《*est*》こそがものの存在様態を、すなわちある実体が実在においてどのような行為しているかを指示するからであり、このようにある個体がどのような仕方で現実態に \langle ある \rangle かということを指示することによつてまさに、命題の真理値が決まるからである。主語は、「実体の様態によつて」意味表示するけれども、それだけではある個体がどのようにあり、どのように行為するかということを示すことはできず、したがつて時制を伴わずに意味表示するだけである。《*est*》を含蓄する述語動詞によつて述語された「あり方」によつて、まさに命題は実在への指示を達成するのであつて、その述語の基体を設定するだけの主語によつてではないのである。

註

- (一) C.J.F. Williams, "On Dying", *Philosophical Quarterly*, 44, 1969, pp.222-223: "to predicate something of an object is to presuppose the existence of the object at the time when the predicate is said to hold of the object".

- (2) C.J.F.Williams, *What is Existence?*, Oxford, 1981, p.76: “There must be something if ‘Aristides’ is to be a proper name, but that does not entitle us to say that Aristides is.” 『『アリストテレス』が固有名であるためには、何かが〈存在する〉必要がある。しかし、だからといって『アリストテレスが〈存在する〉』と言えるわけではない。』
- (3) A.J.Ayer, *Language, Truth and Logic*, London, 1947, p.43: “when we ascribe an attribute to a thing, we covertly assert that it exists: so that if existence were itself an attribute, it would follow that all positive existential propositions were tautologies, and all negative existential propositions self-contradictory; and this is not the case.”
- (4) P.F.Strawson, “Is Existence Never a Predicate?”, *Criteria*, 1, 1967, p.12: “the ascribing of something to an individual, or to some, none or all of a class, where the existence of the individual or of the members of the class is presupposed.” cf. M.Munitz, *Existence and Logic*, New York, 1974, ch.6..
- (5) P.F.Strawson, *Individuals*, London, 1959, p.227: “we cannot coherently construe the substantival expression as a referring expression; for to do so is to construe it as carrying, as a presupposition, precisely that content which the proposition as a whole asserts or denies”. 「その実体的表現が指示的表現であると首尾一貫して解釈することはできない。というのも、そのように解釈すれば、その命題全体が主張もしくは否定するまさにその内容を、その表現は前提していると解釈することになるからである」。
- (6) 様態論者については、加藤雅人「様態理論—統語論を中心に」『言語』vol.26, no.3、大修館書店、一九九七、九〇—九六頁。エルフルトのトマス『表示の諸様態あるいは思弁文法学について』（加藤雅人訳・解説・注解）、『中世思想原典集成19中世末期の言語・自然哲学』平凡社、一九九四、四一三—四五〇頁。cf. Jan Pinborg, *Logik und Semantik in Mittelalter. Ein Überblick*, Stuttgart, 1972; “Speculative Grammar”, in *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, ed. by N.Kretzmann, A. Kenny and J.Pinborg, Cambridge, 1982; G.L.Bursill-Hall, *Speculative Grammars of the Middle Ages*, The Hague and Paris, 1971. なお、シヨータは様態理論とトマスの関係を示唆している。M. Jordan, “Modes of Discourse in Aquinas’ Metaphysics”, *The New Scholasticism*, 54, 1980, pp.401-446.
- (7) Ammonius, *Commentaire Sur Le Peri Hermeneias*, Latin transl. by William of Moerbeke, Louvain, 1961, p.57: “Quod quidem merito praehonoratum est nomen verbo in doctrina, manifestum est; nomina quidem enim existentias significant rerum, verba autem actiones vel passiones, praecedunt autem actiones et passiones existentiae”. $\alpha\lambda\epsilon\theta\epsilon\iota\alpha\kappa\alpha\iota\tau\omicron\mu\omicron\lambda\omicron\gamma\epsilon\iota\alpha$ 語訳は、 α

クィナスや様態論者に知られていた。

- (8) cf. R.H.Robin, *Ancient & Mediaeval Grammatical Theory in Europe*, London, 1951, pp.63-65.
- (9) Cf. Thurot, *Extraits de divers manuscrits latins pour servir à l'histoire des doctrines grammaticales au moyen âge*, Paris, 1869, p.178. (本書には、初期様態論者のテキストが集められている)。
- (10) Non ergo gramaticus, sed philosophus proprias naturas rerum diligenter considerans, ex quibus modi essendi appropriati diversis rebus cognoscuntur, gramaticam invenit. cf. Thurot, p.124.
- (11) Cf. Thomas de Erfordia, *De Modis Significandi sive grammatica speculativa*, c.8: ... duo sunt modi principales entium, scilicet modus entis, et modus esse, a quibus sumpserunt gramatici duas partes orationis principales, scilicet nomen et verbum, 「二つの主要な様態があるもの」に属する。すなわち、エンスの様態とエッセの様態である。これら二つから文法学者たちは主要な二つの品詞、すなわち名詞と動詞をとった。本書は久しくスコトゥスの著作とされていたため、Ludovicum Vives版『スコトゥス全集』(Paris, 1981)の第一巻にある(加藤雅人、一九九四、解説)。ラテン語《nomen》(名詞)は、たとえば《homo》(人間)のように *nomen substantivum* (実体名詞) を指す場合もあり、あるいは《albus》(白) のように *nomen adjectivum* (形容名詞) を指す場合もある。つまり、名詞と形容詞が *nomen* という一つのカテゴリーに分類されている。(加藤雅人、一九九四、注22)。しかし、基本的命題の主要な部分の一つとして、*nomen* が述語動詞と対照されている上のような文脈においては、*nomen* は論理的主語として機能する実体名詞の意味で使われている。
- (12) *Ibid.*, c.8: Modus entis est modus habitus et permanentis, rei inhaerens, ex hoc quod habet esse. Modus esse est modus fluxus et successionis, rei inhaerens, ex hoc quod habet fieri.
- (13) Siger of Courtrai, in Bursill-Hall, p.202: ... esse est proprius actus ipsius entis; cum nomen significat rem suam per modum substantiae seu entis, et verbum per modum significandi fieri seu esse, verbum immediate debet sequi ipsum nomen.
- (14) *In I Sent.*, d.33, q.1, a.1, ad1. このテキストについての詳細な分析は、注24参照。
- (15) Petrus Aureolus, cited in Capreolus, *Defensiones Theologiae Divi Thomae Aquinatis*, Frankfurt, 1967, vol.1, p.320: ... omnis ratio potest concipi modo quiescentis, et talis conceptus exprimitur per nomen, et modo fieri et egressus, et talis exprimitur per verbum. Ergo esse et essentia non differunt. (彼は14世紀初期にパリで教え様態論者と交わった可能性がある)
- (16) Cf. Bursill-Hall, op.cit., pp.204-5. "The weakness of their system is revealed sharply by the need the Modistae felt to rationalize

apparent exceptions in their system, e.g. 'privatio' and 'figmenta' as members of the nomen-class and the position of the 'verbum substantivum' in the verbal system". 「彼らのシステムの弱点をはっきりと露呈しているのは、彼らのシステムにおける明らかな例外、たとえば *nomen* のクラスに属する「欠如」や「虚構」および述語動詞のシステムにおける実体の述語動詞の位置づけを理論化することを様態論者たちが必要だと感じたことである」。

- (17) *In VII Met.*, 1.1, n.1253: ... *modus significandi vocum non consequatur immediate modum essendi rerum, sed mediante modo intelligendi.* 同じようにストローソンは、主語が個体ではないクラスや固有性をその指示対象とすることができているのかを説明するとき、われわれの対象の「概念化の仕方」を重視している。Strawson, *Logico-Linguistic Papers*, London, 1971, p.74: "In so far, then, as things other than spatiotemporal particulars qualify as objects, they do so simply because our thought, our talk, confers upon them the limited and purely logical analogy with spatiotemporal particulars which I have just described".
- (18) *In I Periherm.*, 1.5, n.60: ... *omnis praedicatio fit per verbum ratione compositionis importatae, sive praedicetur aliquid essentialiter sive accidentaliter.*
- (19) *In I Periherm.*, 1.5, n.73: *Quia vero actualitas, quam principaliter significat hoc verbum est, est communiter actualitas omnis formae, vel actus substantialis vel accidentalis, inde est quod cum volumus significare quamcumque formam vel actum actualiter inesse alicui subiecto, significamus illud per hoc verbum est.*
- (20) cf. *De ente*, c.3
- (21) S.T., I, 76, 4, ad1: *Unde manifestum est quod in eo cuius anima dicitur actus, etiam anima includitur; eo modo loquendi quo dicitur quod calor est actus calidi, et lumen est actus lucidi; non quod seorsum sit lucidum sine luce, sed quia est lucidum per lucem. Et similiter dicitur quod anima est actus corporis quia per animam ... est corpus ...*
- (22) cf. *De ente et essentia*, c.2.
- (23) *Catena Aurea*, In Ioannem, c.1: 'Sum' enim verbum duplicem habet significationem: aliquando enim temporales motus secundum analogiam aliorum verborum declarat; aliquando substantiam uniuscuiusque rei, de qua praedicatur, sine temporali motu ullo designat; ideo et substantivum vocatur.
- (24) Cf. *In V Met.*, 1.9, n.893.

- (25) *In I Sent.*, d.33, q.1, a.1, ad1: *Sciendum quod esse dicitur tripliciter. Uno modo dicitur esse ipsa quidditas vel natura rei, sicut dicitur quod definitio est oratio significans quid est esse; definitio enim quidditatem rei significat. Alio modo dicitur esse ipse actus essentiae; sicut vivere, quod est esse viventibus, est animae actus, non actus secundus qui est operatio sed actus primus. Tertio modo dicitur esse quod significat veritatem compositionis in propositionibus, secundum quod est dicitur copula: et secundum hoc est in intellectu componente et dividente quantum ad sui complementum, sed fundatur in esse rei, quod est actus essentiae.* cf. Christopher Martin, "A Distinction Between Different Notions of Existence in the Writings of St. Thomas Aquinas, and its Use to Distinguish Logic from Metaphysics", doctoral thesis, Oxford, 1984 (トマスの《esse sicut verum》の概念を現代の存在量化の概念と比較検討している)。
- (26) 加藤雅人「意味論の内と外—トマス・アクィナス《esse》《significare》」、『中世思想研究』第46号、二〇〇四、七五—九四頁 (とくに、九三頁注31) 参照。
- (27) 重要なのは、トマスが《ens extra animam》や《ens sicut verum》によって語っているのは、存在者の二区分ではなく、《est》という語の意味表示の二区分であるということである。一義的に意味表示するのは、命題を意味表示する限りにおける《ens sicut verum》であって、範疇に区分される実在的ensの固有性としてのverumではない。また、トマスは《est》の基本的な意味を多くの著作において二区分しているが、『形而上学注解』においては、アリストテレスに従って、それを四区分している。(1) 《ens per accidens》(n.887: esse nihil aliud significat quam accidere)、(2) 《ens extra animam》(nn.889-90: 十の範疇に区分される)、(3) 《ens sicut verum》(nn.895-896)、(4) 《ens et esse in potentia vel in actu》(n.897: ens et esse significant aliquid dicibile vel effabile in potentia, vel dicibile in actu)°。しかし、トマスは注解の後のほうで、範疇に区分される《ens》と現実態や可能態における《ens》をともに、《ens extra animam》としてグループ化している (cf. *In VII Met.*, l.1, n.1245)°。同様に、《ens sicut verum》と《ens per accidens》は一つにグループ化される。なぜなら、どちらもens extra animamを表現せず、したがって形而上学から除外されるからである (cf. *In VI Met.*, l.4, nn.1241-43)°。
- (28) *In V Met.*, l.9, n.890: *Unde oportet, quod ens contrahatur ad diversa genera secundum diversum modum praedicandi, qui consequitur diversum modum essendi; quia 'quoties ens dicitur', idest quot modis aliquid praedicatur, 'toties esse significatur', idest tot modis significatur aliquid esse. Et propter hoc ea in quae dividitur ens primo, dicuntur esse praedicamenta, quia distinguuntur secundum diversum modum praedicandi. Quia igitur eorum quae praedicantur, quaedam significant quid, idest*

substantiam, quaedam quale, quaedam quantum, et sic de aliis; oportet quod unicuique modo praedicandi, *esse significet idem*, ut cum dicitur homo est animal, esse significat substantiam. Cum autem dicitur, homo est albus, significat qualitatem, et sic de aliis.

(29) 加藤雅人「くにおいてある」とくに対してある：トマス・アクイナスにおける関係の二つの側面」、『哲学』第21号、関西大学哲学会、二〇〇二年、三七〇-三四五頁参照。

(30) *In V Met.*, 1.9, nn.895-896.

(31) *Ibid.*, n.896: *Esse vero quod in sui natura unaqueque res habet, est substantiale. Et ideo, cum dicitur, Socrates est, si ille EST primo modo accipiatur, est de praedicato substantiali ... Si autem accipiatur secundo modo, est de praedicato accidentali.*

(32) 《est》のこのような意味論的区分は、《Deus est》（神がある）や《malum est》（悪がある）といった、重要な命題の分析に応用される鍵概念である。加藤雅人、二〇〇四参照。